〈共同研究報告〉

保育実習指導の事前指導の現状についての一考察

津　田　尚　子*,　木　村　志　保**,　小　口　将　典**
立　花　直　樹***, 西　元　直　美***, 仲宗根　　稔****

Pre-guidance for practical childcare training : A study of current practice

Naoko Tsuda, Shiho Kimura, Masanori Oguchi,
Naoki Tachibana, Naomi Nishimoto and Minoru Nakasone

要旨：本稿のもとになった調査は、「保育士養成・新カリキュラムに対応した実習教育プログラムの基礎的研究－先行研究・他養成校へのヒアリング調査を踏まえた質の高い養成プログラムの検討－」であり、その目的は、保育士養成（専門職養成）に関する実態把握を行い、課題を抽出・整理し、保育士養成の質の向上及びよりよい保育実践につなげていくことである。調査対象校は、全国の保育士養成校のうち、事前に協力を得られた47校。本稿では、先のヒアリング調査の報告内容から、保育実習の事前指導内で実施されている具体的な指導内容を抽出し、考察を加えた。

Key words：保育実習指導・事前指導・保育士養成課程

Ⅰ．研究目的及び研究背景

2011（平成23）年施行の保育士養成カリキュラム改正[1)]では、「①保育指針の改定の内容及び改定・見直しの背景を踏まえ、保育士養成や保育現場における諸課題に対応すべく保育士養成課程等の見直しを行う。その際、保育現場の実践や保育士の専門性を十分に踏まえた内容とする。②保育現場の実情を踏まえ、実践力や応用力をもった保育士を養成するため、実習や実習指導の充実を図り、より効果的な保育実習にすることが必要である。また、養成施設の増加に伴い、居住型児童福祉施設等における実習受け入れ施設の確保がたいへん難しくなっている実情を踏まえ、実習受け入れ施設の範囲や要件を見直す。（以下、省略）」等の基本的な考え方に基づき、講義・演習科目の統廃合、実践的な演習科目の充実、実習関連科目の単位数増加などの変更が、保育士養成校で実施された。特に実習関連科目において大きかったのは、実際に保育現場に出向いて実習する保育実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ（以下、内容上Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを特

*関西女子短期大学　講師
**関西福祉科学大学　社会福祉学部　講師
***関西福祉科学大学　社会福祉学部　准教授
****関西女子短期大学　教授

別に区別する必要がなければ「保育実習」と総称）に、従来実際的な必要から含みこまれていた事前事後指導が、養成校内での事前事後指導のみ独立して保育実習指導Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ（以下、内容上Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを特別に区別する必要がなければ「保育実習指導」と総称）となり、それぞれ演習 2 単位、1 単位、1 単位を付与されたことである。その意図するところは、実習に出る前に実習生らしい立ち振る舞いや技能を身につける機会を設けることであり、実習後実習生が十分に振り返り、思い違いや技術不足を修正し、次の実習や就職に結びつける機会を持つことである。この科目「保育実習指導」新設により、養成校の学科や実習担当者はそれぞれの養成校で伝統的に実施されていた事前事後指導を見直す必要に迫られた。

本学園におけるこの新カリキュラム適用に際して、他大学の実習指導の時期・回数・教員体制・指導内容の工夫等の実態把握を目的に実施したのが、2011（平成 23）年度調査「保育士養成・新カリキュラムに対応した実習教育プログラムの基礎的研究－先行研究・他養成校へのヒアリング調査を踏まえた質の高い養成プログラムの検討－」である。保育士養成の従来のカリキュラム内での指導や新カリキュラム改訂時に新たに組み込んだ指導、その指導過程において感じられた課題を、実習担当者の本音を含め聞き取ることができた。

それらを整理し、2012（平成 24）年全国保育士養成協議会第 51 回研究大会において、保育実習の事前事後指導ならびに実習の時期、指導上の工夫と体験学習等の取り組み、スーパービションを含む指導実態、実習担当者の専門領域等について発表した[2~4]。そのひとつ「新カリキュラムに対応した保育士養成プログラムの検討Ⅰ－実習実施時期及び体験学習の実施状況－」[2]の中で、多くの養成校において、保育実習指導Ⅰでは 30 回、保育実習指導Ⅱ・Ⅲでは各 15 回の授業回数を充てていることが判明した。また、ほとんどの養成校で事前指導は実習の直前に実施し、実習生の動機づけや記憶が新鮮な状態で実習に臨ませようとする配慮がうかがえた。

さらに、2013（平成 25）年全国保育士養成協議会第 52 回研究大会において、事前指導実施内容に論点を特化し、対象校の工夫を紹介し考察した[5]。本稿はこの発表に基づいたものであり、発表内容の事前指導の実施内容を精査し、現状について検証を加える。

Ⅱ．調査概要

1. 調査対象・期間・調査方法

調査対象については、本研究調査の趣旨について理解し、調査内容に同意が得られた、全国の保育士養成校（4 年制大学、短期大学）計 47 校に所属する保育士養成課程の専任担当教員とした。調査は、2011 年 11 月～2012 年 3 月の期間とし、調査対象校へ訪問し、聞き取り調査を実施した。

2. 調査内容

調査は、①事前事後指導の実施状況、②実習期間の教員間連携・記録の方法、③情報共有する方法などの内容とした。本稿では、以上の調査のうち、①の事前指導の実施内容について、聞き取り調査報告書より文言を抽出して精査する。

3. 調査研究における倫理上の配慮

対象となる団体・個人の人権擁護のための配慮（団体及び個人名・情報等）として、本調査の回答結果については、団体名・個人名・情報等が特定されないよう統計的に処理を行い、本研究の目的にのみ使用することを文書に明記した。本調査対象機関に対しては事前に文書により同意を得た。

4. 分析方法

各養成校の資料には、4 年制大学と短期大学の区別をし、資料を拾い出した順に無作為にコード番号を付与した。ヒアリング内容の聞き取り記述（資料によっては専任担当教員が直に記載した資料も含まれる）から、保育実習の事前指導時に取り組んでいる指導内容を抽出した。その内容を保育士養成課程が事前指導として求めていると思われる項目（以下、「保育士養成課程内の内容」とする）、実習意義、実習の内容と課題の明確化、留意点、計画と記録に即して整理した。項目に漏れた指導上の工夫から、さらに共通点を見出し、「予備・補足体験」、「少人数」の項を立てた。以上の項目立てに該当しなかった内容について

表 1　事前指導上の工夫と実施校の分布整理表

		大学		短期大学	
		記述校コード	記述内容・メモ	記述校コード	記述内容・メモ
予備・補足体験計画と記録	予備実習義務－幼稚園（ケ）			1	1 日
	予備実習義務－保育所（ケ）			6	3 日・義務
	予備実習義務－実習先（ケ）	7	各 1 日		
	模擬学習－子育て支援センター（ケ）	20	子育て支援演習		
	見学学習（ケ）	10.12.21.	保育所	1.15.24	実施後レポート作成・振り返り
	観察実習（ケ）	10			
	体験学習（学外）（ケ）				
	出前保育（ケ）			3.19	保育実践保育Ⅰにて．保育実践保育Ⅰにて体験
	ボランティア（ケ）	12			
	インターン実習（ケ）	16			
意義	先輩とグループディスカッション（ク）	1.6.8.10.12			
	卒業生講話（ク）	5			
	外部講師講義（ク）	2.4.5.7.21.	2 名．保育所・施設	11.17.20.22.	障害・児童分野．現場職員の体験的講義．保育実習指導の講師として卒業生を非常勤雇用．卒業生の経験談を業メニュー内に（就職センター企画）
	他学年間で交流（ク）			3.11.12.15.17	実習交流会（施設）．上級生の実習報告．つながりを重視．上級生の体験発表．
	保育士全体を学ぶ（ア）	2.9.13.22.	役割・意義	13	
	オリエンテーション（ア）	8.10.19.21.	実際、過程（ア）	2.3.13.16.17.	目的、基本要綱、実習種別．目的・意義（ア）
留意点	心得（カ）	7.8.9.19.21.22	留意点も含む	2.11.17.24.	
	手続き指導（カ）	5.9.10.19.21.	健康診断・検便	2.7.9.12.16.18.22.24	個人票（含む自己 PR）を基礎ゼミで・写真撮影は業者に．健康診断・検便・．個人票．入学前に見つけておくようにアナウンス→授業開始後契約
	マナー指導（カ）	4.5.8.10.19.20.	挨拶・礼状・敬語・電話（コ）．礼状	7.9.10.21	挨拶・礼状・敬語・電話（コ）．（1 年）実習依頼の方法・電話（コ）（2 年）職員とのコミュニケーションの取り方（ソ）．社会人・実習生として・提出物の徹底・言葉づかい・身だしなみ等
	生活指導（イ）	5.	掃除・箸	9.10.24	掃除・箸．通勤手段の工夫
	学外オリエンテーションに向けた指導	4.21.		10.16	
	実習先理解	4.9.22.		2.3.11.13.18	ビデオ視聴．施設で実習担当者・ゼミ担・巡回担当から話を聞く「事前勉強会」設定＆全体セミナー

計画と記録	記録指導（キ）	4.5.7.9.12.13.19.21.	日誌．考察に至らない．見本写しから	2.3.7.9.11.12.13.16.17.19.23.24	保育を読み取ることの困難さ・見たまま文字にするだけで精一杯→同 DVD を繰り返し、違った観点で書かせる．総合演習で全教員担当．日誌の書き方・添削（ゼミ単位で、1～3/1 学生）．見本閲覧・サンプルまる写し．初歩は総合保育演習と基礎演習で
内容と課題の明確化	課題作成（オ）	5.8.9.13.21.22.	実習目標設定．目標の添削を含む	3.7.9.13.16.20.24	基礎ゼミ（達成するための具体的な方策も文書で）．目標の添削を含む．事前に 3 つ用意。巡回時確認
	教材指導（ウ）	4.13.	名札・誕生日カード・折り紙・手遊び	3.7.19.23	名札作成．年齢ごとの保育調べ
	実技学習（エ）	10.13.19.20.	読み聞かせ・遊び．設定保育．責任実習	3.16.	模擬実習．グループごとの研究・発表
	指導案指導（キ）	2.4.7.8.13.19.20	添削を含む模擬設定保育	2.11.13.16.23.	
少人数化	少人数グループ化（サ）	1.6.	学生 120 名／教員 5 名．学生 140 名／教員 6 名．	20	保育所・施設で各 4 班編成
	個別指導（サ）	4.5.9.22.	個別の面談に依存している	9.6	日誌の書き方（学生 12 名／教員 2 名）．個人面談
	個別面接（サ）	2.	担当教員による	15.21.22.	心配な学生のみ．実施せず
その他	直前事前指導を授業時間外（シ）	3.7.19.	2 コマ		
	実習判定・実習生スクリーニング(セ)	10.15.	レポート提出	24	履修制限規定満了の学生を配属
	テキスト	12.14.	阿部和子『保育実習』ミネルヴァ．『ミニマムスタンダード』．教員作成資料	12.24.	『保育・教育実習テキスト』（診断と治療社）．視聴覚教材→イメージづくり（ス）
	工夫	7.12.14.	映像による実習現場の情報提供．希望者に発達理解実習．文章力指導．保護者会で協力要請	7.9.15.16.17.22.	コーチング学・しかけ．（幼稚園）ふりかえり指導．調べ学習・プレゼンテーション・ファイリング．乳児へのかかわり．事前事後受講ノート毎週提出・返却．全教科教員でスクラム

注）保育士養成課程が定める内容項目と追加項目（予備・補足体験、少人数、その他）を縦軸におき、ヒアリング内容の聞き取り記述より、該当する記述のあるものをピックアップ、大学・短期大学別に記述のあった記述校コードと記述内容を列挙した（同一記述については省略）。
なお、本文中の記号については下記とおり。
（ア）実習の「意義」に関すること、（イ）「内容と課題の明確化」のうち「生活指導」に関すること、（ウ）「内容と課題の明確化」のうち「教材指導」に関すること、（エ）「内容と課題の明確化」のうち「実技学習」に関すること、（オ）「内容と課題の明確化」のうち「課題作成」に関すること、（カ）「留意点」全般に関すること、（キ）「計画と記録」に関すること、（ク）発展的に「意義」を理解するための取り組みに関すること、（ケ）「予備・補足学習」に属する「模擬学習」「見学実習」などに関すること、（コ）「留意点」に付随する「マナー指導」等の生活指導に関すること、（サ）（ア）～（コ）以外のうち「小グループ」、「個別指導」等に関すること、（シ）（ア）～（サ）以外のうち「実習直前」「授業時間外」等に関すること、（ス）（ア）～（シ）以外のうち映像「イメージづくり」に関すること、（セ）（ア）～（ス）以外のうち適性をはかる「スクリーニング」に関すること、（ソ）保育実習指導Ⅱ／Ⅲにおける保育実習Ⅰを踏まえてのマナー指導関係

は、参照資料として「その他」に分類した。項目の配置については、関連するものが上下近い位置にあるように配置した。各項目で、さらに細分の区分を設けた。

なお、ほぼ同一の指導内容を複数の養成校で取り組んでいる場合、区分ごとに記述した対象校をコード番号で記し、多くの対象校で取り組んでいる指導内容にはたくさんのコード番号が集まるように表を作成した【表 1】。

Ⅲ．調査結果概要

調査対象校は計 47 校〔4 年制大学（以下、大学）23 校、短期大学（以下、短大）24 校〕であった。

基本的には表に基づき保育士養成課程の内容別に検討するが、必修である保育実習指導Ⅰと選択必修である保育実習指導Ⅱ・Ⅲの両方に共通する指導内容は保育実習指導Ⅰに含みこみ、選択必修特有の記述については、保育実習指導Ⅱ・Ⅲとして別立てとした。

1. 保育実習事前指導Ⅰの内容

(1)「保育士養成課程内の内容」

保育実習指導Ⅰにおいて、保育士養成課程が定める事前指導に当たる内容は下記のとおりである。保育実習の意義（実習の目的や概要）、実習の内容と課題の明確化、実習に際しての留意事項（子どもの人権と

最善の利益の考慮、プライバシーの保護と守秘義務、実習生としての心構え）、実習の計画と記録（実習における計画と実践、実習における観察と記録、実習評価）である。

(2) 取り組みの工夫

実習の意義は、オリエンテーションなどで目的・意義の他実際、過程、基本要綱、実習種別、保育士全体を取り上げている【表1内（ア）部分】。発展的に意義を理解するための取り組みとして外部講師講義、卒業生講話、他学年間で交流等があった【表1（ク）部分】。

内容と課題の明確化については、掃除・箸・通勤手段などの生活指導【表1（イ）部分】、名札・誕生日カード・折り紙・手遊び等の教材指導【表1（ウ）部分】、読み聞かせや設定保育等の実技学習【表1（エ）部分】、実習目標設定・目標の添削等の課題作成【表1（オ）部分】などが該当すると思われ、実施されている。補足する取り組みとして、予備実習（幼稚園・保育所・実習先など）を課す、模擬学習（子育て支援センター）・見学実習・観察実習・体験学習・出前保育・ボランティア・インターン実習などが実施されている【表1（ケ）部分】。

留意事項については、心得、手続き指導、学外事前オリエンテーションに向けた指導が該当すると思われる【表1（カ）部分】。具体的には健康診断・検便・個人票・実習先確保の指導などがある。留意事項に付随して、マナー指導、箸の使い方、通勤の仕方の工夫、電話の掛け方【表1（コ）部分】などの生活指導などが取り組まれている。

計画と記録については、指導案作成、記録指導が該当すると思われる【表1（キ）部分】が、他の項目より取り組みが厚かった。大学でも考察に至らないという問題を抱えつつ、見本写しから開始しているところが複数報告されている。短大では基礎演習等を用いて個別添削しているところが複数あった。

それ以外の工夫として、授業の小グループ化・個別指導による文章力指導・個別面談【表1（サ）部分】・実習直前に指導時期を持ってくる【表1（シ）部分】・映像によるイメージづくり【表1（ス）部分】・実習生として適性をはかるスクリーニング【表1（セ）部分】などがなされている。

2. 保育実習指導Ⅱ又はⅢの内容

(1)「保育士養成課程内の内容」

保育実習指導Ⅱ又はⅢにおいて、事前指導に当たる内容は下記のとおりである。保育実習による総合的な学び（子どもの最善の利益の考慮した保育の具体的理解、子どもの保育と保護者支援）、保育実践力の育成（子どもの状態に応じた適切な関わり・保育の表現技術の応用）、計画と観察、記録、自己評価（保育課程に基づく指導計画と実践・保育の観察、記録、自己評価に基づく保育の改善）である。

調査では、必ずしも必修と選択必修に分けて聞き取り調査をしたわけではないが、ヒアリング内容のうち、選択必修に特化した各養成校の工夫を下記に挙げていく。

(2) 取り組みの工夫

ヒアリングの記録には先の実習を踏まえ、実習先の職員とのコミュニケーションの取り方を中心にマナー指導【表1（ソ）部分】、直前指導として時間外に実施【表

1（シ）部分】、表にはないが「重要なことは再教授」などの記述があった。

Ⅳ. 考　察

1. 各教科の学びを統合した実習での学び

結果より、保育の内容がいかに生活者としての自分自身の生活と切り離せないか明確になったであろう。実習生の「生活指導」「教材指導」「実技学習」が、同時に生活者としての「生活指導」「教材指導」「実技学習」であり、その経験でもって子どもや施設利用者を理解し、指導上の声かけの工夫へとつなげている。

保育実習指導の時間に、他教科でも実施されていると思われる教材指導や実技学習が取り入れられているのは、単に技術的な問題だけでなく、実習でいかに生かされるかという観点からも必要なのであろう。勝野・水谷[6]は、造形表現と実習指導の担当者が互いの授業内容やカリキュラムを把握し合いながら授業を進めてきた様子を報告し、次のように結論づけている。

> 保育士養成に係る科目には（各科目名等につき省略）、養成校においては単体で授業が進められているものも多い。しかし、保育現場においては単体では存在するものではなく、常に生活に基づいた具体的な体験の中で総合的に存在するものである。養成校では、このようなことを常に念頭に置きながら、学生指導を展開していくことが重要であることを再認識した。

実習生が資格を取得して入っていく保育現場では、生きることそのもの、健康、安全、生活の知恵や配慮、人間関係の持ち方、表現の技術などがその場にいる保育者から子どもたちに伝えられていく。各科目の知識や技能を、生活の中で総合的に子ども利用者に伝えるための備えという観点からも実習指導を見る必要がある。それにしても保育実習に必要とされる知識・技能は広範囲にわたり、保育実習指導という科目内ですべてを網羅するのは困難である。むしろ、保育士養成課程にある各科目の学びを、保育実習に向けて結び付け再認識につなげることが、「実習や既習の教科の内容やその関連性を踏まえ、保育実践力を培う」[7]ことになると思われる。そのためには、当然実習担当者に限らず保育士養成に関わる全「教員同士の包括的な連携が重要」（小口[3]）になってくるのは言うまでもない。

2. 実習課題の明確化

結果の通り、実習課題は多くの対象校で取り組みの重点内容である。

課題は実習における視点として大事な意味があるが、今般知識や技術の習得から自ずと関心が向き課題作成に結びつくという学生は少ない。事前指導の段階で、卒業生や外部講師の講話や個別指導で学生にイメージを明確化させ、意欲醸成の過程を経て、課題が用意をされているようだ。和田・後藤はロールプレイを用いて実習生が困る事例を実感的に学修できることを報告している[8]。

そのような過程を推進する仕掛けとして、予備実習や模擬学習・見学実習・観察実習・体験学習・出前保育・ボランティア・インターン実習などの体験を経る機会を用意している養成校も少なくない（豊田 2012[2]、木村 2013[9]）。

3. 実習の計画と記録

新カリキュラムの養成課程では、実習の計画と記録は保育実習指導において強調されているものである。結果でも、実際多くの対象校で、取り組みの報告が多かった。栗原は、指導案が「すること」「やること」「目に見えてわかること」等の行為に関することになりがちであることを憂いている。学生の指導計画案に、指導（＝援助）を構成する幼児理解と大人の願いを盛り込むべく、実践基盤を実技と理論を個別と共通とで組み合わせた4つの象現で捉えようとしている[10)]。目にしたものを主体的な観察に基づき言葉にしたり記述したりする作業が実習生にとって苦手になっている今日、個人指導等かなり手厚い工夫によって、体験化実践化することが求められているといえる。エピソード記録をもとに気づきを生む取り組みも各地で実践されている[11, 12)]。

4. 生活経験不足を補うマナー教育

1の各教科の学びを統合した実習での学びでも記した通り、保育の学修は生活者としての自分自身の生活と切り離せない。特に実習生を実習先に送り出すと、マナーが不適切であるという指摘は近年増加している。よって、マナー指導は、円滑な実習実施のために欠かすことのできない内容になっている。結果でも、挨拶・言葉づかい・敬語・身だしなみ等【表1（カ）部分】高等教育課程とは思えない内容がある。一方で、実習生になる学生の実態は「高等教育課程かどうか」を諮る以前に深刻で、思いがけないところで勘違いや配慮不足を見ることになる。よく言われる例としては、何かしていただいた時に一言のお礼が言えない、物を使う時「使ってもいいですか」の一言がでない、食事時に椅子の上であぐらを組むなどである。子どもたちにマナー指導しなければならない者のマナーから見直さないとならない状況である。保育士養成課程にある実習生自身のマナーや家庭環境が、保育士養成課程にない他の学生と比べ、特別素晴らしくて保育士養成課程に入ってきたわけではない。むしろ世情の縮図といえ、自身が適切な世話を受けたことがない者から理想的な環境で育った者まで、社会全体のありようと同様の傾向が見られると考えられる。

5. 学生の主体的な学びに向けて

保育士養成課程を選んだ学生の中には、心から子ども好きな学生だけでなく、就職に結びつく選択肢はこれしかないという必要に迫られて進学してきた学生たちもいる。そのような学生たちの劣等感情は強いものがあり、特に二年制課程の養成校に学んでいる学生にそのような傾向は強く、「大学で学ぶことそのものや、自分の学力に関して、絶望と無力感を抱いているといってもよい」と滝澤は述べている[13)]。

自信のない保育者が自身の育ちの実感を持てないまま保育をするのは、子どもの育ちを信じて見守れない親が子どもに向き合うのと同様、姿勢の軸が定まらず危なっかしいことこの上ない。「学生たちに、学ぶことで自分が成長できた、学ぶことも悪いものではない、自分も捨てたものではない、と実感できるような教育ができれば、その学生の人格にとって、前向きな影響を与えるのではないか」[13)]、そして卒業後学ぶことの意義を子どもたちに伝えることができるのではないかと考える。

そのような前向きな転換の機会として、表 1 の結果（表の上部）にあるような予備・補足体験が設けられているのであろう。親が子どもの笑顔から行き詰まりかかった生活の光を見つけ前向きになれるように、直に子どもや生活に触れるということはそれ自体貴重な機会となろう。ただ注意しなければならないのは、参加させるだけで自ずと生き生きとした体験に目覚めるというほど簡単なものではないということだ。体験学習で受けてきたであろう刺激を拾い出し、気づきにつなげ、そこから子どもと関わる楽しみや学びに結びつけていく体験過程の演出技能が養成校教員を含む指導者に求められている。その技能については他稿に譲るとして、実習指導にあたる担当者は、辛抱強く実習生を養成する際、次のような心がけで実習生に向き合っている。中田らは、「学生が日々の学びを自ら確かめ、そして身につけていく過程を、養成校での『そだち』と捉えると、それはつまり、保育者としての資質と専門性を獲得していく過程」と定義し、その「そだち」の姿を描き出すことによって、学生のより良い「そだち」につなげようとしている[14)]。

今後実習に出ていく実習生の現状は、子どものモデルとなる保育経験や生活体験に乏しく、指導する者にとって「育てなおし」に近いほど細部まで指導せざるを得ない状況である。保育士養成カリキュラムの中で、もしくはカリキュラムを工夫しながら、学生の育つ力を信じて日々養成していくことが、生活経験の少ない学生自身が「そだち」を体感することに繋がるだろう。

＊本稿は全国保育士養成協議会第 52 回研究大会において発表した抄録原稿を修正・加筆した。また、本稿のもとになった研究は平成 23 年度関西福祉科学大学共同研究助成を受けて実施した。

謝辞

ご多忙の中、本研究の趣旨を理解し調査にご協力いただいた保育士養成校及び教員の皆様に感謝いたします。

文献

1）保育士養成課程等検討会「保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）案」『厚生労働省「保育士養成課程等検討会」資料』2010、367–377 頁。

2）豊田志保他「新カリキュラムに対応した保育士養成プログラムの検討Ⅰ－実習実施時期及び体験学習の実施状況－」『全国保育士養成協議会　第 51 回研究大会研究論文集』2012、88–89 頁。

3）小口将典他「新カリキュラムに対応した保育士養成プログラムの検討Ⅱ－実習事前・事後学習の学生へのスーパービジョンの現状と課題－」『全国保育士養成協議会　第 51 回研究大会研究論文集』2012 年、90–91 頁。

4）新川泰弘他「保育実習担当者の専門性の検討」『全国保育士養成協議会　第 51 回研究大会研究論文集』2012 年、414–415 頁。

5）津田尚子他「保育実習指導の事前指導における課題と工夫－訪問調査のインタビューより－」『全国保育士養成協議会　第 52 回研究大会研究論文集』2013 年、398–399 頁。

6）勝野愛子・水谷聡美「保育実習の実践のために（1）－授業で学ぶ保育技術を保育実習でどう生かすか－」『全国保育士養成協議会　第 52 回研究大会研究論文集』2013 年、400–401 頁。

7）保育士養成課程等検討会「保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）案」『厚生労働省「保育士養成課程等検討会」資料』2010 年、405 頁。

8）和田美香・後藤範子「保育実習（保育所）のロールプレイによる事前事後指導（Ⅰ）～子ども理解を中心とした園での対応の仕方を学ぶ～」『全国保育士養成協議会　第 50 回研究大会研究論文集』2011 年、312–313 頁。

9）木村志保他「保育士養成における体験学習の教育効果」『全国保育士養成協議会　第 52 回研

究大会研究論文集』2013 年、122–123 頁。
10）栗原ひとみ「学生の実践力養成についての一考察」『全国保育士養成協議会　第 50 回研究大会研究論文集』2011 年、100–101 頁。
11）木戸啓子「保育実習生のエピソード記録からみる保育実習の学び」『全国保育士養成協議会　第 50 回研究大会研究論文集』2011 年、118–119 頁。
12）宍戸良子他「対話が育まれる実習記録形式（1）－エピソード記録がもたらす学生の気づきに着目して－」『全国保育士養成協議会　第 51 回研究大会研究論文集』2012 年、84–85 頁。
13）滝澤真毅「保育者の養成課程で保育者の『資質』を育てられるのか」『全国保育士養成協議会　第 50 回研究大会研究論文集』2011 年、54–55 頁。
14）中田千穂他「実習における学生の『そだち』～実習アンケートの集計結果から～」『全国保育士養成協議会　第 50 回研究大会研究論文集』2011 年、320–321 頁。